

どんぐりと山猫

宮沢賢治

青空文庫

おかしなはがきが、ある土曜日の夕がた、一郎のうちにきました。

かねた一郎さま 九月十九日

あなたは、ごきげんよろしいほで、けっこです。

あした、めんどなさいばんしますから、おいで

んなさい。とびどぐもたないでくなさい。

山ねこ 拝

こんなのです。字はまるでへたで、墨すみもがさがさして指につくくらいでした。けれども一郎はうれしくてうれしくてたまりませんでした。はがきをそつと学校のかばんにしまつて、うちじゅうとんだりはねたりしました。

ね床どこにもぐつてからも、山猫のやあとした顔や、そのめんどうだという裁判のけしきなどを考えて、おそくまでねむりませんでした。

けれども、一郎が眼めをさましたときは、もうすっかり明るくなっていました。おもてに

でてみると、まわりの山は、みんなたつたいままできたばかりのようにうるうるもりあがつて、まっ青なそらのしたにならんでいました。一郎はいそいでごはんをたべて、ひとり谷川に沿ったこみちを、かみの方へのぼつて行きました。

すきとおった風がざあつと吹くと、栗の木はばらばらと実をおとしました。一郎は栗の木をみあげて、

「栗の木、栗の木、やまねこがここを通らなかったかい。」とききました。栗の木はちよつとしずかになつて、

「やまねこなら、けさはやく、馬車でひがしの方へ飛んで行きましたよ。」と答えました。「東ならぼくのいく方だねえ、おかしいな、とにかくもつといつてみよう。栗の木ありがとう。」

栗の木はだまつてまた実をばらばらとおとしました。

一郎がすこし行きますと、そこはもうふきの滝でした。ふきの滝というのは、まっ白な岩の崖のなかほどに、小さな穴があいていて、そこから水がふきのように鳴つて飛び出し、すぐ滝になつて、ごうごう谷におちているのをいうのでした。

一郎は滝に向いて叫びました。

「おいおい、笛ふき、やまねこがここを通らなかつたかい。」

滝がびーびー答えました。

「やまねこは、さつき、馬車で西の方へ飛んで行きましたよ。」

「おかしいな、西ならぼくのうちの方だ。けれども、まあも少し行ってみよう。ふえふき、ありがとう。」

滝はまたもとのように笛を吹きつづけました。

一郎がまたすこし行きますと、一本のぶなの木のしたに、たくさんの白いきのこが、どつてどつてどつてこと、変な楽隊をやっていました。

一郎はからだをかがめて、

「おい、きのこ、やまねこが、ここを通らなかつたかい。」

とききました。するときのこは

「やまねこなら、けさはやく、馬車で南の方へ飛んで行きましたよ。」とこたえました。

一郎は首をひねりました。

「みなみならあつちの山のなかだ。おかしいな。まあもすこし行ってみよう。きのこ、ありがとう。」

きのこはみんないそがしそうに、どつてこどつてこと、あのへんな楽隊をつづけました。一郎はまたすこし行きました。すると一本のくるみの木の梢を、栗鼠がぴよんととんでいました。一郎はすぐ手まねぎしてそれをとめて、

「おい、りす、やまねこがここを通らなかつたかい。」とたずねました。するとりすは、木の上から、額に手をかざして、一郎を見ながらこたえました。

「やまねこなら、けさまだくらいうちに馬車でみなみの方へ飛んで行きましたよ。」

「みなみへ行つたなんて、二とこでそんなことを言うのはおかしいなあ。けれどもまあもすこし行つてみよう。りす、ありがとう。」りすはもう居ませんでした。ただくるみのいちばん上の枝がゆれ、となりのぶなの葉がちらつとひかっただけでした。

一郎がすこし行きましたら、谷川にそつたみちは、もう細くなって消えてしまいました。そして谷川の南の、まっ黒な樫の木の森の方へ、あたらしいいちいさなみちがついていました。一郎はそのみちをのぼつて行きました。樫の枝はまっくろに重なりあつて、青ぞらは一きれも見えず、みちは大へん急な坂になりました。一郎が顔をまっかにして、汗をぽとぽとおとしながら、その坂をのぼりますと、にわかにはつと明るくなって、眼がちくつとしました。そこはうつくしい黄金いろの草地で、草は風にざわざわ鳴り、まわりは立派な

オリーブいろのかやの木のもりでかこまれてありました。

その草地のまん中に、せいのおかしな形の男が、膝ひざを曲げて手に革かわ鞭むちをもって、だまつてこつちをみていたのです。

一郎はだんだんそばへ行つて、びっくりして立ちどまつてしまいました。その男は、片眼で、見えない方の眼は、白くびくびくうごぎ、上着のような半はんでん纏んのようなへんなものを着て、だいいち足が、ひどくまがつて山羊やぎのよう、ことにそのあしきときたら、ごはんをもるへらのかたちだったのです。一郎は気味が悪かったのですが、なるべく落ちついでたずねました。

「あなたは山猫をしりませんか。」

するとその男は、横眼で一郎の顔を見て、口をまげてにやつとわらつて言いました。

「山ねこさまはいますぐに、ここに戻もどつてお出でやるよ。おまえは一郎さんだな。」

一郎はぎよつとして、一あしうしろにさがつて、

「え、ぼく一郎です。けれども、どうしてそれを知ってますか。」と言いました。するとその奇きたい体たいな男はいよいよにやにやしてしまいました。

「そんだったら、はがき見だべ。」

「見ました。それで来たんです。」

「あのぶんしょうは、ずいぶん下手だべ。」と男は下をむいてかなしそうに言いました。一郎はきのどくになつて、

「さあ、なかなか、ぶんしょうがうまいようでしたよ。」

と言いますと、男はよろこんで、息をはあはあして、耳のあたりまでまっ赤になり、きものえりをひろげて、風をからだに入れながら、

「あの字もなかなかうまいか。」とききました。一郎は、おもわず笑いだしながら、へんじしました。

「うまいですね。五年生だつてあのくらいには書けないでしょう。」

すると男は、急にまたいやな顔をしました。

「五年生つていうのは、尋常^{じんじょう}五年生だべ。」その声が、あんまり力なくあわれに聞えましたので、一郎はあわてて言いました。

「いいえ、大学の五年生ですよ。」

すると、男はまたよろこんで、まるで、顔じゆう口のようにして、にたにたにたにた笑つて叫びました。

「あのはがきはわしが書いたのだよ。」

一郎はおかしいのをこらえて、

「ぜんたいあなたはなにですか。」とたずねますと、男は急にまじめになって、

「わしは山ねこさまの馬車別当べつとうだよ。」と言いました。

そのとき、風がどうと吹いてきて、草はいちめん波だち、別当は、急にていねいなおじぎをしました。

一郎はおかしいとおもって、ふりかえって見ますと、そこに山猫が、黄いろな陣羽織じんばおりのようなものを着て、緑いろの眼をまん円にして立っていました。やっぱり山猫の耳は、立って尖とがっているなど、一郎がおもいましたら、山ねこはびよこつとおじぎをしました。

一郎もていねいに挨拶あいさつしました。

「いや、こんにちは、きのうははがきをありがとう。」

山猫はひげをぴんとひっぱって、腹をつき出して言いました。

「こんにちは、よくいらつしやいました。じつはおとといから、めんどうなあらそいがおこって、ちよつと裁判にこまりましたので、あなたのお考えを、うかがいたいとおもいましたのです。まあ、ゆつくり、おやすみください。じき、どんぐりどもがまいりますよう。」

どうもまい年、この裁判でくるしみます。」山ねこは、ふところから、巻煙草の箱を出して、じぶんが一本くわえ、

「いかがですか。」と一郎に出しました。一郎はびっくりして、

「いいえ。」と言いましたら、山ねこはおおようにわらって、

「ふふん、まだお若いから、」と言いながら、マツチをしゅつと擦つて、わざと顔をしかめて、青いけむりをふうと吐きました。山ねこの馬車別当は、気を付けの姿勢で、しゃんと立っていました。が、いかにも、たばこのほしいのをむりにこらえているらしく、なみだをぼろぼろこぼしました。

そのとき、一郎は、足もとでパチパチ塩のはぜるような、音をききました。びっくりして屈んで見ますと、草のなかに、あっちにもこっちにも、黄金いろの円いものが、ぴかぴかひかっているのです。よくみると、みんなそれは赤いずぼんをはいたどんぐりで、もうその数ときたら、三百でも利かないようでした。わあわあわあわあ、みんななにか云っているのです。

「あ、来たな。蟻のようにやってくる。おい、さあ、早くベルを鳴らせ。今日はそこが日当りがいいから、そこのとこの草を刈れ。」やまねこは巻たばこを投げすてて、大いそぎ

で馬車別当にいいつけました。馬車別当もたいへんあわてて、腰こしから大きな鎌かまをとりだし、ぎっくぎっくと、やまねこの前まへのこの草を刈りました。そこへ四方の草のなかから、どんぐりどもが、ぎらぎらひかつて、飛び出して、わあわあわあ言いしました。

馬車別当が、こんどは鈴すずをがらんがらんがらんと振りふりました。音はかやの森に、がらんがらんがらんとひびき、黄金きんのどんぐりどもは、すこししずかになりました。見ると山ねこは、もういつか、黒い長い繻子しゆすの服を着て、勿もつ体たいらしく、どんぐりどもの前にすわっていました。まるで奈良ならのだいぶつさまにさんけいするみんなの絵のようだと一郎はおもいました。別当がこんどは、革かわ鞭むちを二三べん、ひゆうぱちつ、ひゆう、ぱちつと鳴なりました。

空が青くすみわたり、どんぐりはぴかぴかしてじつにきれいでした。

「裁判ももう今日で三日目だぞ、いい加減いばになかなかおりをしたらどうだ。」山ねこが、すこし心配そうに、それでもむりに威張いばつて言いますと、どんぐりどもは口々に叫なびました。「いえいえ、だめです、なんといつたつて頭のとがってるのがいちばんえらいんです。そしてわたしがいちばんとがっています。」

「いいえ、ちがいます。まるいのがえらいのです。いちばんまるいのはわたしです。」

「大きなことだよ。大きなのがいちばんえらいんだよ。わたしがいちばん大きいからわたしがえらいんだよ。」

「そうでないよ。わたしのほうがよほど大きいと、きのうも判事さんがおっしゃったじゃないか。」

「だめだい、そんなこと。せいの高いのだよ。せいの高いことなんだよ。」

「押おしつこのえらいひとだよ。押しつこをしてきめるんだよ。」もうみんな、がやがやがやがや言つて、なにがなんだか、まるで蜂はちの巣すをつついたようで、わけがわからなくなりました。そこでやまねこが叫びました。

「やかましい。ここをなんとこころえる。しずまれ、しずまれ。」

別当がむちをひゆうぱちつとならしましたのでどんぐりどもは、やつとしずまりました。やまねこは、ぴんとひげをひねって言いました。

「裁判ももうきようで三日目だぞ。いい加減に仲なおりしたらどうだ。」

すると、もうどんぐりどもが、くちぐちに云いました。

「いえいえ、だめです。なんといったって、頭のとがっているのがいちばんえらいのです。」

「いいえ、ちがいます。まるいのがえらいのです。」

「そうでないよ。大きなことだよ。」がやがやがや、もうなにがなんだかわからなくなりました。山猫が叫びました。

「だまれ、やかましい。ここをなんと心得る。しずまれしずまれ。」

別当が、むちをひゆうぱちつと鳴らしました。山猫がひげをびんとひねって言いました。「裁判ももうきようで三日目だぞ。いい加減になかなおりをしたらどうだ。」

「いえ、いえ、だめです。あたまのものが……。」がやがやがや。

山ねこが叫びました。

「やかましい。ここをなんとこころえる。しずまれ、しずまれ。」

別当が、むちをひゆうぱちつと鳴らし、どんぐりはみんなしずまりました。山猫が一郎にそつと申しました。

「このとおりです。どうしたらいいでしょう。」

一郎はわらつてこたえました。

「そんなら、こう言いわたしたらいいでしょう。このなかでいちばんばかで、めちやくちやで、まるでなつていないようなのが、いちばんえらいとね。ぼくお説教できいたんです

「山猫やまねこはなるほどというふうにならずいて、それからいかにも気取って、縹しゆす子のきもの胸えりを開いて、黄いろの陣羽織をちよつと出してどんぐりどもに申しわたしました。

「よろしい。しずかにしろ。申しわたした。このなかで、いちばんえらくなくて、ばかで、めちやくちやで、てんでなっていないなくて、あたまのつぶれたようなやつが、いちばんえらいのだ。」

どんぐりは、しいんとしてしまいました。それはそれはしいんとして、堅かたまってしまいました。

そこで山猫は、黒い縹むち子の服をぬいで、額の汗あせをぬぐいながら、一郎の手をとりました。別当も大よろこびで、五六ペン、鞭むちをひゆうぱちつ、ひゆうぱちつ、ひゆうひゆうぱちつと鳴らしました。やまねこが言いました。

「どうもありがとうございます。これほどのひどい裁判を、まるで一分半でかたづけしてくださいました。どうかこれからわたしの裁判所の、名譽判事めいよになってください。これからも、葉書が行ったら、どうか来てくださいますか。そのたびにお礼はいたします。」

「承知しました。お礼なんかありませんよ。」

「いいえ、お礼はどうかとつてください。わたしのじんかくにかかわりますから。そしてこれからは、葉書にかねた一郎どのと書いて、こちらを裁判所としますが、ようございませぬか。」

一郎が「ええ、かまいません。」と申しますと、やまねこはまだなにか言いたそうに、しばらくひげをひねって、眼をぱちぱちさせていましたが、とうとう決心したらしく言い出しました。

「それから、はがきの文句ですが、これからは、用事これありに付き、みょうにち明日 日出頭すべしと書いてどうでしょう。」

一郎はわらって言いました。

「さあ、なんだか変ですな。そいつだけはやめた方がいいでしょう。」

山猫は、どうも言いようがまずかった、いかにも残念だというふうに、しばらくひげをひねったまま、下を向いていましたが、やっとあきらめて言いました。

「それでは、文句はいままでのとおりにしましょう。そこで今日のお礼ですが、あなたは黄金きんのどんぐり一升しょうと、塩鮭しおさけのあたまと、どっちをおすきですか。」

「黄金のどんぐりがすきです。」

山猫は、鮭ししゃけの頭でなくて、まあよかつたというように、口早に馬車別当に云いました。

「どんぐりを一升早くもってこい。一升にたりなかつたら、めっきのどんぐりもまぜてこい。はやく。」

別当は、さっきのどんぐりをますに入れて、はかつて叫さけびました。

「ちようど一升あります。」

山ねこの陣羽織が風にばたばた鳴りました。そこで山ねこは、大きく延びあがって、めをつぶって、半分あくびをしながら言いました。

「よし、はやく馬車のしたくをしろ。」白い大きなきのでこしらえた馬車が、ひっぱりだされました。そしてなんだかねずみいろの、おかしな形の馬がついています。

「さあ、おうちへお送りいたしましょう。」山猫が言いました。二人は馬車にのり別当は、どんぐりのますを馬車のなかに入れました。

ひゆう、ぱちっ。

馬車は草地をはなれました。木や藪やぶがけむりのようにぐらぐらゆれました。一郎は黄金きんのどんぐりを見、やまねこはとぼけたかおつきで、遠くをみていました。

馬車が進むにしたがつて、どんぐりはだんだん光がうすくなって、まもなく馬車がとま

つたときは、あたりまえの茶いろのどんぐりに変わっていました。そして、山ねこの黄いろな陣羽織も、別当も、きのこの馬車も、一度に見えなくなつて、一郎はじぶんのうちの前に、どんぐりを入れたますを持つて立つていました。

それからあと、山ねこ拝というはがきは、もうきませんでした。やっぱり、出頭すべしと書いてもいいと言えばよかつたと、一郎はときどき思うのです。

青空文庫情報

底本：「注文の多い料理店」新潮文庫、新潮社

1990（平成2）年5月25日発行

1997（平成9）年5月10日17刷

初出：「イーハトヴ童話 注文の多い料理店」盛岡市杜陵出版部・東京光原社

1924（大正13）年12月11日

入力：土屋隆

校正：noriko saito

2005年1月26日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

どんぐりと山猫

宮沢賢治

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>